

---

# 男たちの賛歌

斉藤ノブヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

男たちの賛歌

### 【コード】

N9788H

### 【作者名】

斉藤ノブヒロ

### 【あらすじ】

男達の様々な視点で書きました。

**愛することをしなくなった男（前書き）**

注意・この作品はフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

作者も病んでいません。

## 愛することをしなくなった男

俺はもう、誰も愛さない。数年前にあんなことがあったから。

きつく言ってしまったせいであいつは俺を突き倒して、出て行ってしまった。

俺は愛した相手を傷つけてしまうから。

(雨の道で思わず転んでしまって、女性から手を差し伸べられる)

「大丈夫ですか？」

(手に捕まらず、自分から立つ)

「いや、何でもない。何でも。」

「思わず逃げてしまった。人の親切を素直に受け取れない……  
・、いつの間にかそうなってしまった。」

誰も好きにならない。好かれない。

好かれないようにする為なら簡単だが、今の俺には、それが出来ない。

思いっきり暴れていれば、誰も近寄りたいたとは思わなくなるだろう。

人との仲を絶って引きこもれば、俺に視線が向くことは無くなる、  
そう思っていた。

孤独が欲しかった。どうすれば手に入る？ どうすれば、俺は誰も見られなくなるんだ？

こんな高い所から身を乗り出せば、俺は永遠に孤独が味わえるだろう。

「・・・・・・・・！！！」

「!？」

あの時俺と別れた奴がここへ来た。何だよ・・・・・・・・俺はもうそんなつもりなんてないのに・・・・・・・・。え？勘違いしてた？ 何だよそれ・・・・・・・・だからやり直さないかって？ 急に言われてもな・・・・・・・・

二人で下りていく山道、

俺には、こいつの手を握るべきかそうでないかもわからねえ・・・・・・・・

## ヒーローになりたかった男

ヒーローになれば誰も好かれる。俺はずっとヒーローになりたい  
と思っていた。

でも実際は残酷だ。敵対する者もいなければ、ヒーローだってその  
一人しかない。

たとえ闘う敵がいなくとも周りでいいことをすればみんなに好かれ  
る、と思っていた。

しかし、どんなに頑張っても、認められない。

そんなの有りかよっ！

学校の時だって、俺はどこにでもいるどうでもいい存在だ。

最初っからアイツ等を信じていなかったわけじゃない。

俺はアイツ等の前で一生懸命頑張っていた。それなのにアイツ等は  
全く見向きもしない。

むしろアイツ等、俺を罵倒して余計な奴扱いしやがって！

先生にだって俺の方が信用されているのに。(と思いついでいた)  
先生は……、アイツ等の方を好いている。

俺はアイツ等も先生も信じていたつもりなのに、まるで裏切られた気  
分だった。

高校で学んだことは、勉強を除けば、“簡単に相手を信じてはいけ  
ない”それだけだ。

正義になれないのならもういつそ悪になってもいい！

アイツ等の靴箱に画ビヨウ仕掛けてやろうと思った。でも、もしそ  
れをやったら進学にも響くからやらなかった。その間何もやらなか

ったのは俺の中でそんな自制心が働いていたからだ。命拾いしたな  
お前ら。

俺を正面から見てくれる人はいないだろうか。少なからず思ってい  
た時はあった。そんな人がいたら俺は心許して付き合えるかもしれ  
ないだろう。

・・・なに言ってんだろ俺。それは確かに嬉しいがそんな都  
合のいい話がある訳がない。少し欲を張りすぎた。

横断歩道を横切ろうとする御老人を見かけた。どうせ俺がやらなく  
たって、他の奴がやってくれるだろう。

・・・・・・、  
キッ!!

「おばあちゃん大丈夫？ 手伝うよ。」

「はい、ありがとうございます。」  
「いえいえ。」

・・・なんだ、

こんな身近にあったとは・・・、  
知らなかったよ・・・

## 必要とされない男

まただ。

また俺だけ解任された。

会社にいる周りの奴らよりも学力だって俺の方が優れているというのに。

どいつもこいつも俺の良さを知らない奴ばかりだ。

考えてみりゃあ高校だって、

こっちは親切にいろいろしてきたというのに。

なのにあいつらは俺をのけもの扱い。

卒業式が終わったあとなんか、

「お前の顔はもう見たくない。ただ付き合ってたただけだ。」

おおおおいっ！

人の気持ち考えてモノ言ってるのかよ。

長い休暇があつた日に友達みんなは旅行に出かけていたらしい。どうして俺も誘ってくれなかつたんだと問い詰めたら

「悪い、お前のこと忘れてた。」

ってそんなのありかよ。

大事な仲間だと思ってるねえのかよ。

犯罪を起こして馬鹿を見る奴らとも違うというのに……  
くそお……くそお……くそお……

家に帰って俺はまたひとり、

どうして……俺ばかり……

## 詩人である男

その日電車に乗っていた時のことだった。

「人身事故の影響により列車の遅れを申し上げます……」  
またか……

電車や駅のホームでよく聞く光景ではある。

滅多にはないがしょっちゅう起きるわけでもない事故。

引かれた人も災難だろうし、学校に遅刻する僕にとっても災難だ。

学校には遅刻した。

列車の遅れによる通知書を先生に出した。

いつも時間きっちりに来る僕にとっては、辛い経験だった。

いつものように食堂で注文をしているときだった。

僕は肉うどんを注文していた。

カウンターには海老の天ぷらの入ったうどんが出された。しかし、取りに来る人はいなかった。

順番待ちでは僕がその次だった。でも取りに来る人はいない。するとおばちゃんがその上に肉をのせると、

「天ぷらはサービスです。」  
と言った。

“ 災難や幸運は思わぬところからやってくる ”

僕の中で一瞬頭をよぎったフレーズだ。

別の日、今度は売店に行っていた。

売店のおばちゃんは今日もいない。

少し前まではそのおばちゃんによくお世話になっていたんだけど、今は少し買うのに躊躇してしまうものがある。そんな時に思った。

“無くしてから分かる暖かさがある”と

教室ではいつも通りに孤立している。

からかっているとか馬鹿にしているとかそんなんじゃない。まるで相手にされない、と言っべきだろうか。

家に帰るとご飯と一緒に味噌汁が出される。

「…………ふう。」

“学校に所在を無くしている中味噌汁だけが温かい”

僕の詩はまだ誰にも見せたことがない。

でも、僕の詩を良さを理解してくれる人がいることを、信じていたい。

## 信じられない男

暖かい………

周りの感じがとてもいい。

みんな仲間に入れてくれる。

孤独という選択肢しか残っていない俺にとってそれはとても幸せだ。

中学も高校も最悪だった。

中学では複数の奴らに虐められ、

高校では最後の学年になると何もかもに絶望を受けた。

それから俺は何も信じられなくなった。

本当に信じていいのだろうか？

いつまでこんな関係が保てるだろうか？

途中で飽きたりしないだろうか？

うざがられてないだろうか？

俺のことをどう思っているんだ？

周りに直接聞くのが早いかもしれないが俺の性格上できない。

気になる、気になる、気になる、気になる、気になる、  
気になる、気になる、気になる、気になる、気になる、  
気になる、気になる、気になる、気になる、気になる、  
気になる、気になる、気になる、気になる、気になる、



## 人に左右される男

「俺の意見はこうだ！」

意見は述べることは出来るが、

「こんなもどうだ。」

「いや、こうした方がいい。」

他の奴らと意見が対立すると、他の人ならだいたい捻じ曲げたりはしないだろう。

でも俺の場合は、

急に勢いがなくなってしまう。

それが俺の悪い癖だ。

だから学校の文化祭の出し物体育祭の応援団の曲に困ってしまう。

とは言っても優柔不断なのは親譲りらしいのだが、

こんなところで俺の悪い癖が出てきてしまうとは……！

恨む宛すらない……

他に満足にいかないことは

連絡事項まで自分は正しいのか考えてしまう。

まずい……

これでは一人で暮らすようになってしまった時にどうすればいいん

だろう？

そして今俺はアパートに一人で暮らしている。

知らないことは近くの部屋に住んでいる人に聞く。

俺は一人じゃ何もできないのか！？

そんなことを考えてしまう今日のこの頃

## 家庭がある男

会社からの帰りの道

俺はいろんなことを考えてしまった。

いつからだろう・・・

あいつ（妻）は俺を“愛してる”と言わなくなった。

とは言つものもう20年もこうしているからな、  
いちいち言っていたら拉致が開かないだろう。

娘は数年前までは

“私大きくなったらパパと結婚するの”  
と言っていた。

しかし今は

“パパ最低！勝手に入って来ないで”  
とどやされた。

それ事態に納得がいかない訳ではない。

そうであるのが当然だと思っただからだ。

他にいい男でも見つけたら

俺なんてもうどうでもよくなるから・・・

二人は度々俺に隠し事をする。

お菓子やご馳走を俺に黙って食べているのなら  
別に隠し事にはするのではないと言えるんだが。

あいつ（妻）はいつも帰りが遅くても

“早く帰ってきてね”という電話はない。

相手を信頼しているのかあまり信じていないのかは分からない。  
少なくとも浮気など男として最悪な行為を

俺はやっていない。

娘にどれだけどやされようが構わない。

これでやっと成長したんだなと

むしろ喜べる。

二人がどんなに変わっても、

あそこは俺の帰るべき場所だ。

## 大人しすぎる男

高校の時はずっとこうだった。  
このキャラで通してきた。

何に対しても情熱を燃やす一面すら見せずに  
どんなに貶されても怒り狂わずに受け流してきた。

中学校までの俺は暴走していた。  
あの時はまだ若かった。  
気に入らない相手に反撃もできた。

そんなこんなで学校では騒動を起こしてきた。  
親にもよく叱られた。  
俺がどんなに怒りをぶちまけても  
いい結果なんてうまれない。  
それ以降 高校の3年間でも  
暴れたことはない。

俺はもはや、牙の折れた猛獣となってしまうた。

獲物を捕える為であり猛獣にとっての誇りであるそれを失った猛獣は  
自分より小さい者はおるか  
少し前まで襲って獲物としていた者にまでやられてしまうのが自然  
の摂理である。

しかし俺は猛獣ではない。  
自然の摂理というものも当てはまらない。  
その代わり、俺は何もしなければ  
誰にも相手をされないとということになる。

最初から気付いてはいたんだ。  
俺には孤独な方が丁度いい。  
誰にも理解されないとこのも  
悪くないと思った。

## 負けの多い男

また負けた……

そんな相手は勝った気でいることではなく  
おれが勝手にそう思い込んでいるだけだと思っ

誰かと争っているわけでもなく  
勝負を仕掛けたり挑まれたわけでもない。

おれははなから勝負を挑んだり受けることはない。  
おれがきつと負けるから。

受けたりしなければおれが負けることはない。  
最初から勝負などしなければ  
おれが負けることはない。

たとえ勝ったとしても  
勝った気がしない。  
納得がいかない。

悔しいが

周りにいる奴は、  
おれより優れている。

それ故おれは逆に劣っている。

天下りという方法もあるんだが  
そんなことはやらない。

自分の下を見てどうする？  
どう考えても五十歩百歩だ。

おれより優れた奴に会いたい

## 希望と絶望の間にいる男

オレの兄貴は性格が悪い。

しかし外面そとづらはとてもいい。

友達の男子を見てオレは思う。

“ どうしてあんな人がオレの兄じゃないんだろう…… ”

親父はオレの良き理解者である。

でも説教が怖いだけでちよっとの嘘をついてしまっただけなのに

親父はすごい大きな問題にしてしまう。

彼ほどいい人は他にいないとは思っている。

暖かさが何か空回りをしている。

オレには友達がいる。

よく話もする。

しかし別のクラスだ。

ただ、同じクラスであっても、

その大きな輪になっっている奴らの中に入れない。

同じ考えで同じ趣味を持つのに中に入れないなんて

悲しすぎる。

帰りでは、よく挨拶をかけられる。

バスや電車の中では、親しい者同士の話声が聞こえる。

友達は地元の人々だから

オレはいつも一人だ。

授業は真面目に聞いているつもりだが  
成績は中の下。

他の奴らは居眠りや隣の奴らとおしゃべりしているクセに  
成績は中の上だ。

周りの奴らは臨機応変が利き過ぎて、  
オレにはそんなことが出来ない。

そんなこんなでオレは高校へ進学した。

元々中高一貫だが

オレは受験して別の高校へ行った

いや、逃げたと言ってもいいかもしれない。

周りには少し前までとは全く違う人達ばかり。  
心配ごとなのは、

また二の舞にならないだろうか。

オレはオレの生きている意味を知りたい。

知ってる人がいるなら、

ぜひ教えてほしい。

## 操り人形のような男

まるで自我がない。

人の目を気にしすぎて

もう一人じゃ何もできない。

裳抜けの殻となってしまっただけ俺にはいろいろなことが辛かった。

昔はよく兄貴と兄弟でケンカをした。

二人ではなく、人がたくさんいるところで

とにかく自分の強さを見せたかった。

でも周りにそんな反応はなく

兄貴も少しとして性格も変わらなかった

陰で悪口を言っても

友達やものに当たっても

すつきりしない。

むしろ先生や親に怒られた。

俺の中には空虚さが残るだけだった。

そしていつしか心の中に

大きな隙間ができた

高校は進学校に入学した

毎週のごとくある問題集の課題をいつも欠かすことなくやっていた。

他の奴らなんて中には全くやらない奴もいた。

俺も先生に褒められる為にやっていたのではない

先生はむしろ褒める訳がない

学校のやり方だけあって

やるのが当然のことだったから  
自分の心にできた隙間を少しでも埋めようとする為にやっていたに  
過ぎない。

学校をサボろうと思ったこともない  
サボったら当然親にキレられるのもあったが  
本当に行きたくないと思った日でも行っていた。  
それをクラスの奴らは集団で平気で出来る

卒業式のとくに皆勤賞の目録をもらった  
でもちつとも嬉しくなかった  
当然のことを俺はしただけだった  
それなのに讚えるなんてなんだか馬鹿げている

「おしゃべりはいけませんよ!」  
「だから俺しゃべってないですよ!」  
大学の授業中ではそんな会話がはびこる  
他の人々と比べて俺は静かに行っている  
先生に好かれようとするこれもそれが目的ではない  
やはり隙間を埋めるための何かである。

もし俺が今、  
自身の足で歩けと言われたら  
困難極まりないだろう。  
自身の足で立とうとしない俺は

抜け殻と一緒にだ………

## 大人しすぎる男 (二人目)

思い返してみたら  
いろんなことがあった。

ちいさい頃の俺はすごい悪ガキだった。  
家では怒られるから  
学校でやっていた。

いろんな人に当たった  
今、考えてみたら

俺はよくないことをしていたんだと分かる。  
反省の言葉を言おうにも言えない

過ぎてしまった出来事を振り返って  
キレられる恐れもあるだろうし  
もう思い出したくないことかもしれない  
そんな反省の意味も込めて

俺は彼らに関わらず  
知らないふりをするようにした。

高校に入り、気持ちを新たにしようとした  
変えることがそう簡単ではない性格も  
大人しく控えめに変えた

無理矢理と言ってもいいだろう。  
周りの人々も互いに知らない人ばかり  
俺が高校に入る前の暴れ馬のような性格だったということもわから  
ない。

俺が怒るところさえ見せずに  
このように振る舞えば  
良さをわかってくれる人もいるかと思っていた。

だが、俺は何か思い違いでもしていたのだろうか  
人は集まるどころか

よそ者扱いをされるようになっていた。

無茶苦茶な言葉を言われても

無理矢理抑えた性格をまた引き起こす気力さえ失われている

父さんもかつては同じ高校に通っていたらしい

俺は父さんの時代の方が良かった

父さんみたいな性格の人でも

親しい仲の友達がいて

クラスや他の女子にモテていた

そんな父さんが俺にとっては

カッコ良かったから

今の俺では上を向いても前を向いても

やはり引きずるものが多い

なんで早く気付かないだろう

もしも周りの人間が俺みたいな性格だったら

俺は・・・・・・・・

なぜこうなってしまったのか

わからねえ…………

言葉が出ねえ…………

## 曇っている男

分からない・・・・・・・・

どうしてこいつは怒っている？

俺は何か間違った事でもしたのか

コイツがただ単に怒っているだけなのか  
分からない。

先生からきつく言われたことがある。

「もう少し人のいいところも見なさい」と。

いいところを探せ？

見つけれたら苦労しねえよ。

と言いつつも俺は先生に言われた通り学校でそいつらの後を辿りながらいいところを見出そうとしていた。

しかし駄目だった。

どこを見てもダラダラした光景ばかり

そんなところで見出そうとしても

どこを言えばいいのか分からねえ

あんな奴らのどこがいいんだ？

ひよっとしたら俺が見てないどこかで何かがあるのか？

俺はこいつらと一緒に付き合っただけではない。

家に行ったり連れてきたことすらない。

人のいいところを見ろって言われても

先生・・・・・・・・

無理が有りすぎです。

ある日俺は授業中に

「あっ、」

いろんなことを考えていたせいか手に力が入り  
消しゴムを落とした。

そうすると前の席に座っていた

嫌な奴らの仲間の一人が

「ほら、」

消しゴムを拾って俺に渡してくれた。

なんだよ……………!!

急に優しくしてくるんじゃないやねえよ……………!!

バカヤロウ……………!!

## 信頼する友達を失った男

友達からの突然の言葉だった。

「俺学校を辞めるんだ。」

その時はあまり実感が湧かなくて軽く受け流してしまったが本当はかなり動揺した。

改めて義務ではないことを俺は知った

電車の中で一緒に話をしている彼の悲痛な叫びを聞いていた。もしかしたら彼は俺よりも気に病んでいたのかもしれない。

彼は学校に入って初めての友達だった。

右も左も分からず

友達の作り方も下手くそになり

孤立意識を持っていた俺に

優しく声を掛けてくれたのは彼だった。

まだ言ってくれただけかもしれませんと思う

もし黙って行ってしまったら

今よりも長く引き摺ってしまっただろう。

彼がいなくなってしまうたら

俺は誰と話すればいいのだろう

両親の都合で行ってしまうのならまだ分かる

まさか働きに出るなんて……

住み込みや一人暮らしをしたことがない俺にとっては辛い現実だった。

友達がいなくなつて俺は今  
心は頑丈な扉のように閉ざされている  
周りにはそれぞれ固まつて仲良しの集まり  
今さら仲良くできるわけがない  
周りの声なんか聞きたくない  
彼の変わりなんていない……………

誰か俺の扉を開けてくれるやつはいないだろうか

## 周りと同化できない男

学校では朝から夕方まで7時間授業  
その気もないのに俺はやっている

そこに紛れてやるフリをしてはみるけど  
先生はすぐにそれを見抜く。  
俺は見抜かれる。

授業態度はしっかりしていても  
重視されるのは試験の成績だけ  
やりたくない科目はいつも補習  
俺にとつては辛すぎる

とりあえず何かを提案したい。

学校の行事でみんなが驚くようなことをやりたい  
しかし周りの奴には全くと言っていいほどその気がない。  
言ってもどうせ返ってくるのは

「じゃあお前がしろよ。」

投げっぱなしにされるのがオチだった。  
それが恐くて結局何もしない始末

とりあえず誰もやらないことに取り組んでみる。

でもアイツらは仲良しを優先して

俺のことは目もくれない。

どんなに頑張っても

見てくれる者がいないと意味がない

俺は無意味に一人相撲でもしているような感覚に陥った。

どの場所においてもいつもそう。

親しい中の人々と一緒にいてはみるが  
俺はまるで無視  
空気よりも軽い存在

もし俺を色で表すとすれば  
無色でも白でもなく  
何とも交わることのない黒  
だから俺は周りと交わることもできず  
誰も近より難しい  
という感じの空気を俺は作っているのだろう。

俺が幸せになる場所は

一体どこだろう？

## 今までの少ない人生を振り返る男

いつからだろう・・・

おれはスーパーに行ってもガムをねだらなくなった。

デパートの端っこにあるメダルコーナーに行くことがなくなった。

最近流行っているおもちゃに興味を示さなくなった。

また欲しいとも思わずどうしてうちだけとも言つことがなくなった。

人と競うことがなくなった

人とすれ違つても挨拶をするようになった

もらった後にありがとうと言つようになった

悪いことをしたら謝ることを知った

眠たくなったら寝るということを知った

いつの間におれはいろんなものから離れ、いろんなことを覚えたの  
だろう？

ただ覚えるという面倒なことではなく

全てにおいて自然と身に付いたと言つべきか

そしてその日は何もやらなかったと

日々過ごしていく時間に後悔まで覚えるようにもなってきた。

時間を無駄にしたくない

自分の人生がどこまで続くのかわからない

自分が今まで築いてきた道は意味があるのか？

友人や家族の人の為ではなく自分の為に

結局おれの言いたいことは

周りが変わるに連れて自身も変わっている

そういうものなんだろう。

わからなくて・・・・・・・・

## 優しくない男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物には一切関係ありません。

## 優しくない男

俺は 人に嫌われている

自覚してないわけではない でも人には気付いてないフリをする

世渡りが上手ではなく

誰これ構わず俺は人に好かれていない

人には強く当たってしまふ。

ただ深い理由なんてものはなく 一方的に

「相手の気持ちを考えてことがあるのか」と聞かれたら  
おそらく皆無だ。

弟にも変な気を使われてしまふ

俺がそれを望んでるわけでもないのに  
あいつにもついカツとなることがある

もう自分でもどうしようもできない。

俺が今みたいな性格になつたのはなんでだろう

遠い記憶の何処かにあるのかもしれない

あれは確か 俺が幼少の時だったと思う

同じ同級生の女子が野犬に襲われていた時だった

俺は捨て身で襲われそうになつた彼女を助けたつもりだった

しかし彼女は怒った

「なんでいきなり来るのよ！ 自分一人でもなんとかできたのに！」

そう言った後彼女は俺の目の前から去った

その時俺は思った

俺がどんなに優しくしても 俺がどんなに頑張っても  
俺がどんなに気を使っても 俺がどんなにその身を削っても  
相手にその気がないのならなにをしても意味がないと

その時の遺恨トラウマが残っているせいか

俺は自分のことだけにしか捉われず

相手のことをまったく考え無くなってしまった。

俺はあの時の仕返しを

今になつてしているのかもしれない

俺の優しさを知ってくれる人が現れるまで

今日もまた俺は 人に優しくならぬことをやめないだろう。

**写真家である男（前書き）**

注意：この作品はあくまでフィクションです

実際の人物、事件とは一切関係ありません

## 写真家である男

俺は今

カメラマンをしている。

主に風景がメインだ。

風景を眺めていると気付くことがある

季節や天気を除いて

ほとんど変わるところがないということだ。

この変わらない景色が

あと何年このままでいられるか

いい目印にもなる

畑や田園だったところが駐車場に変わる

大きかった山が崩されマンションやスーパーマーケットが設けられる  
それらが仕方のないことなのかどうなのかはわからない。

俺はただ写真を撮っているだけなので

ここに建てるな とか言う権利はない。

人はあまり撮り慣れていない

こう撮れとか

そうじゃないとか

指図があるから

仕事でやらなければならぬのであればそんなプライドは全く役に  
立たない

風景は何一つものを言わない

ものを言わないからといって

黙っていればいいと言うわけではない。

ただもしも言葉があるのなら

ひとつやふたつぐらい言っただけでほしい気もする

『フォトコンテスト』と言われる大会がある  
ただ 風景を撮って人に評価されて競う  
それは俺にとっては流儀に反している  
人に見せたいから撮っているわけではない  
自分が撮りたいと思ったから撮る。  
そこに人の意見が入らないのであれば  
他に理由はいらぬ。

俺はただ

どんなに変わることがない景色でも  
何一つものは言わなくとも

その時だけでしか見ることのできない風景を  
写し出している  
そんなものなんだろう。

## 雪にうつたれる男(前書き)

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件には一切関係ありません。

## 雪にうつたれる男

・・・・・・・・・・・・・・・・寒い・・・・・・・・

顔や手に冷気が突き刺さり 足が悴んで痛い

ここ最近でまったく見ることのできなかつたほどの雪だった。

吐く息も白い

今までになかつたほどの白い息が出た

町の中でも相当雪が降っていたので

山の山頂辺りにある学校はさらに積もっていた

学校に着くと 足元にはたくさんの人の足跡が出来ていた

車の轍わだちと一緒に

この跡を歩いて行けば安全なのか

俺はそこを歩いた

ただその方法が正しいのかどうかはわからない

昼になり昼食にしようとする。

食堂は本館にはなく

また雪の降り積もった白い世界の中を歩かなければならない

それでも俺は行った

食堂は他の場所より低い地にあるので下り階段がある

ただし雪は容赦なく降ってくるので足元を気をつけないと滑ってし

まう恐れがある

俺は焦らないように一歩ずつ降りて行った

やっこのことで食堂に着くと  
ほとんどのメニューに売り切れのランプがついていた  
おそらく売り切れではなく  
限られたこれらしか販売することができないと言った方が正しいだ  
ろう

バスはどんなに悪天候であっても時間通りに来る

バス停までの帰りの道で 俺はかなり往生した

轍わだちの部分には雪融けの水が溜まり

雪は溶けかけていたので 踏んでしまうと水がズボンの裾に散って  
しまう

さらに日が暮れて周りの気温が下がると雪融け水が氷になってもつ  
と滑りやすくなってしまふ危険性もある

俺はそんないろいろ危険予測をしながら慎重に行った

これが俺の体験したことである

ただ こんなことは嫌という訳ではない

温暖化の現象で騒がれていたとしても 決して裏切ることなくこの  
ような季節は来る

俺が言いたいののはただ それだけだ。

言いたいことも言えない男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件には一切関係ありません。

言いたいことも言えない男

俺は、

引っ込み思案だ。

相手に言葉で言うのは苦手だ。

それに俺の言葉は聞き取りづらい

言葉に出さないものならなんだってかまわない

兄弟はどいつもこいつも

俺の良さがわからない。

別にそんなことは気にしていない

多くのことを望んでいるわけではない

身内にそんなやつがいなくても、

俺のことを理解してくれる人々がいる。

掲示板には必ず行く

なるべく実名が上がらないところに

掲示板に行けば

俺はスーパーヒーローになれる

俺はみんなに愛される上流紳士になれる

しかし兄、弟アイツらのせいで

俺にはそんなことができない。

やはりヒーローはヒーローなりに

隠しておく必要があるから

いつもそうだ

身内の奴らはいつも俺をのけ者にしようとする

俺も輪に入りたいのになぜか疎外されている

よく行く場所にはどこに住んでいてどんな名前なのか知らない人々ばかり

それでも俺の良さをわかってくれる

俺はその利便さに

のまれてしまっているのかもしれない。

俺には、

俺さえいれば……………

自分だけが正しいと思っていた男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件には一切関係ありません。

自分だけが正しいと思っていた男

俺は常に正しい

何も間違っつてなんかいない

周りの奴らは皆

間違いの塊　クズだ

そう考えていた時代が俺にはあつた。  
もう今となつては昔の話になる。

小学生の頃だろう

そんな考え方を持っていた時のピークは

俺は周囲を困らせていた

間違つた奴らを言葉や暴力で貶していた  
それを弟に告げ口されると親に怒られた  
俺の何が間違つていると言うんだ

俺がどんな悪いことをしたというんだ  
なのになぜ俺は怒られる

そんな気持ちでいつも　親の説教を聞いていた

集団行動は嫌いだった

班長はいつも指図ばかり

もちろん相手も責任感を持ってやっていることであって そんなものは俺が勝手に思い込んでいるだけにすぎない

自分の希望がすぐわなかった時に

かなり言い争いが起こり相手もほとんどお手上げ状態だった。

そんな支配が嫌だった俺は いつも一人で登校していた

そして俺が班長になって先導する役目を持った時

集まりが悪かった時にかなりイライラした。

人のことをどうこう言える立場でもないのに

まるで自分は柵上げだ。

相手にはさんざんやっているのに

やられると無性に腹が立つ

そんなサディスト的な一面もあった。

その時の俺では全く考えることもできなかった

どうせ俺が悪いに決まっている

一つだけ年がしたな後輩が生意気にすると 俺は本気で怒鳴った

相手はただからかっているだけだと思っうのに

相手が正しい意見や行動をしたとしても

オレはそれを認めなかった 認めたくなかった

いろいろなことがあった

自分だけが正しいと思っていた時が

自分だけが信用できると思っていた時が

それが時が経つにつれて

正しいことだと思わなくなってしまった

単なる自己中心的な考えだと 気付いてしまった。

自分が貫いてきた信念らしきものもだんだん脆くなり

そしてそんな考え方は 次第に削除されていった。

全てが間違っていると思うようになった今  
俺は周りにいた人々と仲良くやっている

そう これでよかったんだ。

これで・・・・・・・・・・・・・・・・

**真実を見落としてしまっている男（前書き）**

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件には一切関係ありません。

## 真実を見落としてしまっている男

オレの兄ちゃんは性格が悪い

オレの姉ちゃんもオレに対してひどい

未だけあって オレの扱いばかりひどすぎる。

不満や悪口は直接本人には言わず

いつも陰で言っている

だから父さんも母さんもおそらく困っている。

友達を見てこう思う

“ 彼のような人がオレの兄ちゃんだったらよかったのに ”

“ 彼女のような人がオレの姉ちゃんだったらよかったのに ”

ただそんなことを考えていた。

しかし オレはうつかり見落としてしまっていた。

他の友達も外面ソウゴトだけがよく見えるだけであって

同じ兄弟だったとしたら やはり接し方も違うのだろう。

彼らのようにオレも 兄ちゃんも姉ちゃんも

ひよつとしたら同じことをやっているのかもしれない。

購買部のおばちゃんはいつもオレに優しい

オレも常連の感覚でもう顔も知られている中である

他の人は強引や無理を言っ て おまげや値引きをしてもらおうとする

オレはそんなことをしてほしいと思っ たこともない

優しくしてくれるのは他のみんなも一緒

そう おばちゃんは等しくみんなに優しいのであってオレばかりが特別なわけではない

一生懸命なところを先生は見てくれている

先生はオレだけを見ていてほしい

少なからずそんな気持ちを抱いていた  
先生は授業中によく息子の話をする  
やはり先生も親だったということだ。  
オレは結局 ただの生徒にすぎない

人の感情は特にわかりづらい

普段は温厚そうな性格の人でも本当は何かを思い悩んでいたり重い  
悩みを抱えてたりする

犯罪などまで発生するのはそれらが抱えきれずに爆発を起こしてい  
るものだろう

「誰でもいいから殺したい」というのは三者の者からすれば迷惑な  
話だが

抱えてたものが多すぎて 自分でも制御できない そんな状態だっ  
たに違いない

そんな人間はオレを含め周りにいる人々もそう少なくはないはずだ。

オレはいろんな真実を知った。

シヨックを起こしているというわけでもなく オレはそれらのもの  
からただ目を背けていただけなのかもしれない。

早めに気付いてよかったのかどうかは分からない  
一時の恥で よかったのかどうかは分からない。

時の流れを感じる男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

## 時の流れを感じる男

どんなに時が流れても

どんなに時間が過ぎようと

変わるものもあれば変わらないものもある。

俺は電車を寝過した

気がついたときには電車は駅のホームから出て行った。

目的の駅からは一つ行き過ぎてしまった

最初はしまったと思ったが

行きすぎてしまったのは仕方がない

この町の景色を見るのは久しぶりである

とは言うものの 電車からの景色が

通学でもこちら側に乗ることはないので

ほとんど体験することはないだろう。

外の景色はあまりにも普通である

変わり映えするところなどもない

古ぼけた感じの町中に所々新しく改築された家がある

都会と言う感じにはほど遠い

都会ではないからこういう味が出るのであろう。

何気なく見る景色の中で

自分はいろいろなことを感じた。

変わり映えのない景色がひよつとしたらいいのかもしれない  
その中に高いマンションやビルが建ったら  
むしろそっちに違和感を感じるだろう。

「まったく発展がない」と言う他の声も聞くが  
変わらないからいいのかもしれない。

そうは言ってもまったく変わらないというものはない  
公園だったところは公衆トイレのある広場に変わり  
畑や荒地だったところは駐車場に変わっていた  
変わってしまったものは変わったもので仕方がない  
ただ そこには確かにそれがあった  
しかし何も残すことができないと思ったら  
非常に嘆かわしい。

そんなことを感じながら電車の景色を見ていた  
しかしこれだけは覚えておかなくてはならない  
時間の流れは止まることを知らない  
タイムマシンや時間を止めることができる時計が発明されない限りは

それまではその一秒一秒を大事にし また後悔しなくてはならない。

## 雨にうつたれる男(前書き)

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

## 雨にうたれる男

また傘を盗まれた。これで三回目だ。  
しかも外はザアザア降りだ。ついてない。

俺の傘は確かに一際目立つ  
他の傘に比べたらかなり大きい  
それ故普通の傘より値段は高い。

盗んだ犯人の顔さえ知らない。  
そして何のために盗んだのかもわからない。  
自分のと間違えて持って帰ってしまったのならまだしも  
確信して盗んだり自分が持ってきてないのに盗んだのなら許せない。  
だがやられた後に俺が何を言おうと  
盗んだ奴は知らない顔をするに違いない。

雨は俺に集中攻撃を掛けるように降ってきた。  
靴も含もズボンもびしょ濡れだ。  
傘を挿さずに濡れながら帰る人をカッコいいと思う者もいるが  
少なくとも俺はそうは思わない。

家まで帰るときに電車やバスを使ったとしても  
その間は屋根の見当たらない道を行かなければならない。  
それに比べたら住み込みで居る者は帰るところまであまり距離も長  
くないから楽だ。

自分の持ち物に名前を書かなかった俺に非があるのか  
盗んだ相手に非があるのか  
そんなことは後から考えてももう過ぎた話で意味もない。

俺も着ている物もたくさん雨を浴びた。

自然と乾くことはない。

浴びてたときからもう数十分は経ったというのに、

ひよっとしたら俺は明日

風邪で寝込んでいるだろう……

今までの少ない人生を振り返る男（二人目）（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

## 今までの少ない人生を振り返る男（二人目）

寝転がったまま オレは昔のことを走馬灯のように思い返していた。暇をもて余したわけではないが、いまは何もやりたい気分ではなかったから。

今となつてはすべて昔のことになる。

小学校ではテストで100点がとれた

あの時はまだ大変ではなかった。

とれるのが当然な時期だった

中学校に入ると小学校で受けていた教科も少し奥が深くなり小学校でも見ることがなかった教科も追加された。

成績もなかなか100点がとれなくなつた

己の知識不足なのか 努力不足なのかもうわからない  
高校に入るともはや理解の問題ではない

オレはただ留年や赤点にならないかを心配しながら行つた。

どの学校も成績が主でそれ以外のものは二の次みたいなものだった  
成績が悪いからの“馬鹿”は  
からかうので使うものよりひどい

たくさん人を切り捨てた

なぜそんなことをしたのかはとうの昔に忘れた。

大人げないことをやってきた

相手に悪いところはない。

なんでオレばかりやられるんだ。

それ以上にオレは人にやつていた

そんなサディスト的な気分に浸っていた時もあった。

やつた方はすぐに忘れるかもしれないがやられた方はいつまでも覚

えている。

今思い返してその時でオレのことを嫌った奴は少なくともいるだろう。

そして今 オレはここにいる。

昔のことに後悔はできても

その時に戻ることはできない。

こんな意味のないことを考えていても

時間は止まることなく過ぎていく。

悲しいような 悲しくないような……

## 一方的な男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

## 一方的な男

学校で企画会議が行われていた。

学校の名前は伏せるが俺は映像などを撮る仕事を目指す人のための学部にいる。

自分の意見を言うだけ言い 反論や人の意見には耳を傾けない。  
例えるなら俺は国の政治家のような男だ。

お互いに話が噛み合わない 主な原因はおそらく俺にある。  
自覚はそこそこしているつもりだが俺はどうしても直すことができない。  
自分の中に染み着いてるせいかな直すことは難しい。

大学に入る前からもしかしたら向いていなかった、  
さらに後ろ向きに考えたらそんな気分になる時もある。

他のみんなはどうしているのか なぜあんなにまとまるのが早いのか  
それが不思議でならない。  
仲がいいからか 趣味がほぼ同じだからまとまるのが早いからなのか  
そんなことを言っても俺はただ自分の“非”をごまかしている感じ  
しかしてこない。

自分ばかり突き進んでしまつのがよくない  
人の意見も聞かずにいた。

俺の意見が誤っているとしても  
それを認めなかった。

自分ばかり熱が入りすぎて周りが見えなくなるという  
自分の中でもわかる悪い癖がある。

ただ自分の意見だけでなく、他の人の意見も取り入れてしまうため

だから余計まともらない。

指定された期間はもうすぐ  
俺ひとりでは何もできないのか

## 先輩である男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

## 先輩である男

俺はみんなから親しまれる。

みんなから信頼されている。

みんなは俺の後をついて来る。

みんなを失望させないようにする為に、先達として、陰で頑張るのが俺の役目だ。

怒ったところで何も始まらない。

「気にするな！」

口癖のごとく俺が言う言葉だ。

次に掛ければいい。これでまたひとつの勉強だと思ってもらえればいい。

本番に近づいている場合は少し焦らないといけないが今なら、まだこつするべきだ。

ただ、みんなは思い違いをしている。

俺はみんなよりものを知っているだけであって、別に神様というわけではない。

他のみんなも関心には思えるが、みんなは俺をそれ以上に關心する。それが俺にとっては嬉しくもあり、不安でもある。

俺が先輩だった時の時代はかなり荒れていた。

ときには癪癢を起こして、逃げたりしたことだってあった。

そんな俺を先輩としてのし上げるなんてどうにかしてる。

みんなより年配だからって俺だけ上げようとするなんてどうにかし

てる。

俺にはこんな立場に立てる立場すら疑問だ。

いえることは後輩に簡単に説明だけをするこゝとならできる。  
それ以外にセンスを問われたら俺でもさすがに悩む。

俺は先輩として、 向いているのだろうか………

## 小説家である男（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。

実際の人物、事件等は一切関係ありません。

## 小説家である男

俺は今、小説を書いている  
どんなジャンルのものかと言われたら

……なんだろう？

推理小説にしても読み手が考える要素はない。

時代物にしても古い風景や近未来な風景はない。

SFやアクションにしてもそんな迫力ある描写はない。

ファンタジーやミステリアスにしても不思議な感覚はない。

俺の書いている小説は ジャンルが特定できない

読み手の目線から見れば難しくてわからないと言つ意見をする者も中にはいるだろう。

読み手をかえつて不快な思いにさせてしまう場合も中にはあるだろう。

思い立ったらすぐに書く

それが俺のやり方だ。

そうでもないと思うとすぐ忘れるし 忘れた頃にまた思い出すにはすぐ時間が掛かる

夢の中でもいいものだなと思つたものはすぐに書く

しかし この場合はすぐ忘れるから気をつけるべきだ。

あらゆる意味において これらのものには

目的というものが必要である。

イラストなどの自分で考えた作品だってそう

俺の場合は人の心情を語っている

決して言葉に出さなくても 心の中ではそう呟いている

それを様々なシチュエーションを用いて書いている

正直楽しいものとは言いにくい

物事を後ろ向きに考えたりいろんな条件をつけて考える者たちばかり、

そんな彼らが何を考え 何を思うのか それを文で書いている。

なかなか思い浮かばないときは妙に腹が立つ

俺はフリーでやっているがこれが仕事だったらアイデアが浮かばなくても、無理矢理搾らなければならぬ。

今はまだ売れっ子じゃなくても

読者の期待を裏切ってはならない。

小説家としての俺は そんなものである。

## 小説家である男（後書き）

以上で『男たちの賛歌』は終了します。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9788h/>

---

男たちの賛歌

2011年1月18日14時35分発行